

# 『日本語会話モジュール学習者ガイド』開発 の基本方針と理論的背景

海野 多枝 (東京外国語大学助教授)

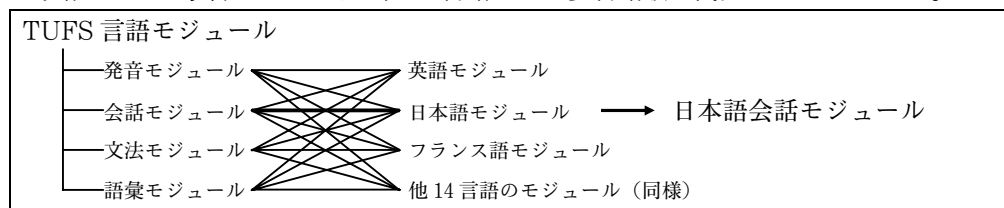
菊池 富美子 (東京外国語大学大学院博士前期課程)

野村 愛 (東京外国語大学大学院博士前期課程)

## 0. はじめに

本稿では、東京外国語大学大学院地域文化研究科 21 世紀 COE プログラム「言語運用を基盤とする言語情報学拠点」事業の一環として開発中の『日本語会話モジュール学習者ガイド』(以下、『学習者ガイド』)を取り上げ、開発の根幹となる基本方針とその理論的背景について論じつつ、『学習者ガイド』の具体的内容と構成案を提示する。

『学習者ガイド』は、同 COE プログラムで開発した E-ラーニング教材『日本語会話モジュール』<sup>1</sup>で学ぶ学習者の補助となるコンテンツで、現在、筆者ら同 COE 言語教育学班(第二言語習得班)が開発を進めている。<sup>2</sup>『日本語会話モジュール』とは、インターネット上で 17 言語を学習できる E-ラーニング教材『TUFSS 言語モジュール』<sup>3</sup>のうち、日本語の会話学習用のコンテンツを指す。『TUFSS 言語モジュール』を構成する 17 言語は、全て発音・会話・文法・語彙の 4 モジュール<sup>4</sup>から成り、このうち日本語の会話にあたるのが『日本語会話モジュール』である(【図 1】)。また、『日本語モジュール』については、学習者の母語を通して学習できるように、17 言語による多言語版の開発が進みつつある<sup>5</sup>。



【図 1】 『TUFSS 言語モジュール』における『日本語会話モジュール』

<sup>1</sup> 『日本語会話モジュール』(海野多枝監修) 東京外国語大学大学院地域文化研究科 21 世紀 COE プログラム「言語運用を基盤とする言語情報学拠点」URL: <http://www.coelang.tufs.ac.jp/modules/ia/index.html>

<sup>2</sup> 開発チームは、海野多枝、菊池富美子、野村愛、小早川麻衣子、鈴木綾乃、橋本ゆかり、森本眺美、松本明子。このうち基本設計は海野、菊池、野村が担当している。

<sup>3</sup> 『TUFSS 言語モジュール』東京外国語大学大学院地域文化研究科 21 世紀 COE プログラム「言語運用を基盤とする言語情報学拠点」URL: <http://www.coelang.tufs.ac.jp/modules/index.html>

<sup>4</sup> 「モジュール」は、ここでは機能的まとまりを持つ自己完結的な教材構成上のユニットを指す。『TUFSS 言語モジュール』では、音韻・語彙・形態・統語の構成要素が、それぞれにある程度自己完結的、独立的な構造として捉えられ、発音・会話・文法・語彙の各モジュールを構成し、後に相互に関連づけられる(川口 2004)。

<sup>5</sup> 2005 年 7 月現在、英語版、中国語版、モンゴル語版が完成している。

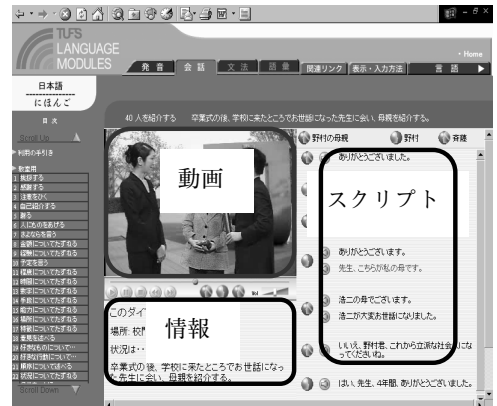
インターネット上にある『TUFVS 言語モジュール』の最大の利点の一つは、時間的・空間的制約を超えて、自宅などの教室外環境においても利用が可能となる点である。ことさら、『日本語会話モジュール』は、教材やリソースの乏しい海外の日本語学習者による利用をも視野に入れており、そうした環境では自己学習<sup>6</sup>やセルフ・アクセス学習<sup>7</sup>による利用が見込まれる。同教材がモジュール形式を取るのも、多様な学習者のニーズに対応する汎用性、柔軟性への配慮と無関係ではない。

しかし、教師の指導を直接受けない学習形態では、問題も予想される。同種の教材を使い慣れない学習者や自律性の高くない学習者には、コンテンツの提供だけでは効果的な利用は望めない。こうした問題を睨み、多くの E-ラーニング教材にはコンテンツと同様に学習支援システムが用意されている（既存の E-ラーニング教材のサポートシステムについては、本書の橋本・森本（2006）を参照）。同様に、自己学習やセルフ・アクセス学習での利用を想定した場合は、『日本語会話モジュール』の有効活用や学習上の問題点の克服を助けるサポートシステムが必要となる。『学習者ガイド』は、こうしたサポートシステム開発の試みでもある。

本稿では、まず『日本語会話モジュール』の概要を紹介し、次に『学習者ガイド』開発の基本方針と内容について述べ、最後に『学習者ガイド』の構成案を提示したい。

## 1. 『日本語会話モジュール』の概要

『日本語会話モジュール』<sup>8</sup>は、『TUFVS 言語モジュール』の他の会話モジュールと同様、40の言語機能を軸とするユニットから成り、各ユニットではそれぞれの言語機能が会話場面に基づいて提示される。40の機能は、代表的な機能範疇と既存の代表的教材（日本語・中国語・朝鮮語・スペイン語・ドイツ語）から抽出されたものである。（付録1「機能」欄を参照）。『日本語会話モジュール』の特徴は、大学生活に必要な日本語に焦点を絞り、これら40機能に対応する初級レベルの文型・表現を選定し、日本の大学生活の会話場面に埋め込み、関連表現、語彙とともに提示している点である。会話は、教室、研究室、食堂、図書館など大学内の様々な場所で、大学生の男女、教師、事務員等の登場人物の間で展開される。先輩と後輩、教師と学生等の関係や、授業、



【図2】会話モジュール「教室用」の画面構成

<sup>6</sup> 定義は2.1を参照。

<sup>7</sup> セルフ・アクセス学習とは、リソース、教師、他の学習者から成る環境との相互作用を通して独自の方法で学べるように組織された学習形態のことである(Gardner and Miller 1999)。

<sup>8</sup> 『日本語会話モジュール』の詳細は Matsumoto and Umino (2004)にも詳しい。

放課後等の場面的要素に注意することで、機能と構造との関係をより詳細に学ぶことも可能となる。また、話題は、授業登録、レポートの提出、学園祭等、日本の大学生活に関するもので、4月から3月までの学年暦の中で起こる活動や行事を反映している。この他、会話の中には、名前の呼び方、就職活動、謝恩会などの社会・文化事項が埋め込まれている。これらによって、日本の大学生活についても学べるように工夫されている。『日本語会話モジュール』のシラバスの概要は、付録1を参照されたい。

学習者は、まず「教室用」か「学習者用」のいずれかのページを選択し、次に40のユニットの中から好きなものを選択する。「教室用」ページ（【図2】）では、会話が動画、音声とスクリプト（文字化された会話）によって同時に提示される。学習者は各自のニーズに応じて、スクリプトの表示／非表示、情報（会話状況／文法／語彙）の切り替え、各登場人物の音声消去などを行うことができる。「学習者用」ページでは、1つのユニットを選択した後、さらに4つの学習モデル（「聞いて話す」「聞いて書く」「読んで話す」「読んで書く」）の中から選択して学習する。それぞれのモデルは、5つの学習段階をふんで進むように組まれている。

## 2. 『学習者ガイド』開発の全体方針

以上の『日本語会話モジュール』の特性をふまえ、『学習者ガイド』開発の全体方針として以下の三点を確認しておきたい。

### 2.1 自己学習における利用を想定する

まず、『学習者ガイド』は、主に自己学習する学習者の学習支援をねらいとしている。先述のように、インターネット上で活用できる『日本語会話モジュール』は、教室外環境を含む幅広い学習者による多様な学習形態での利用が想定される。特に日本語学習用リソースの乏しい海外では、自己学習による使用が多くなることが見込まれる。自己学習とは、「制度化されていない、学習者の自発性に任された学習形態」（海野 2004）をいう。自己学習やセルフ・アクセス学習など教師の介入度の低い学習形態では、学習管理や、学習動機および学習そのものの維持が困難になる場合があることが指摘されており（李 2003）、また、その解決策の一つとして、教材自体の中に学習を支援する要素を盛り込む方法が提案されている（Dickinson 1987）。『学習者ガイド』は、『日本語会話モジュール』を自己学習で使用する学習者を主たる対象とし、こうした学習者へのサポートシステムの一環として開発するものである。但し、『学習者ガイド』が提供するコンテンツは、教師のリソースとしても有効であるのはいうまでもない。

### 2.2 E-ラーニング教材としての『日本語会話モジュール』の特性を活かす

第二に、『学習者ガイド』は、『日本語会話モジュール』の E-ラーニング教材としての特性を活かせるよう工夫が望まれる。E-ラーニング教材とは「インターネット技術など、コンピュータを活用した教育システムや学習方法の総称」(山本 2001) であり、CD-ROM などの形態を用いる「CALL (Computer-Assisted Language Learning)」と区別されることもある(大嶋 2001)。日本語教育ではとりわけコンピュータの利用が盛んになった 1980 年代後半以降、数々の E-ラーニング教材が開発された<sup>9</sup>。E-ラーニング教材は、他のメディアによる教材と比べて、次のような特性が指摘される(池田 2001, 李 2003)。

- (1) 文字・音声・画像を同時に扱うことができる。
- (2) 即時的なフィードバックが可能である。
- (3) 時間的・地理的制約を軽減する。
- (4) 教材の内容や構成について、迅速な更新が可能である。
- (5) 情報の交換・検索・発信が可能である。
- (6) 優れたデザインと構成、操作の楽しさでも学習者をひきつける効果がある。

『学習者ガイド』の開発においても、上述の特性を活かせるよう配慮していきたい。

### 2.3 既に用意されているサポート機能を活かし、欠けている部分を補う

第三に、『学習者ガイド』で提供しうるサポート機能の中には、既に『TUFSS 言語モジュール』全体のサポート機能として開発が進んでいるものもあり、こうした既存の機能を活かしつつ、欠けている部分を補う工夫が望まれる。橋本・森本(2006)は、既存の E-ラーニング教材 57 に見られるサポート機能を、Dickinson (1987), 海野(2004)に基づいて以下のように分類している。

#### 1) 学習管理を助ける要素を持つ機能：

(ア) レコードキーピング

- ① 個人学習の管理
- ② 他の学習者の学習状況の参照

(イ) カウンセリング・質問への回答

(ウ) 明示的な学習目標の提示

(エ) 学習方法の提示

(オ) テスト・練習問題

- ① プレースメントテスト
- ② 練習問題・理解度確認テスト

#### 2) 学習上の柔軟性を高める要素を持つ機能：

(ア) 文字・音声・映像の目的に合わせた利用

(イ) レベル選択

(ウ) 他のリソースの提示

---

<sup>9</sup>本書の橋本・森本(2006)は57の第二言語学習用 E-ラーニング教材のリストを作成している。

- ① 他のサイトへのリンク ② オンライン辞書・ウェブ検索
  - ③ 他のリソースの紹介
  - (エ) コンテンツ内の相互リンク
  - (オ) 携帯電話サイトとの連動
  - (カ) 印刷
  - (キ) インデックスシステム
- 3) 学習動機を高める要素を持つ機能：
- (ア) エンターテイメント的要素
    - ① ゲーム ② 効果的デザイン・BGM 等
  - (イ) 検定試験などの情報
  - (ウ) 毎日・定期的な更新
  - (エ) メールマガジン
  - (オ) ユニットサイズが短く、学習しやすい

このうち、『TUFS 言語モジュール』全体として既に開発されている、あるいは現在開発中のものは次の通りである。まず、学習管理を助ける機能として、レコードキーピングシステムとテスト・練習問題は大学内で学ぶ学習者用の E-ラーニングシステムが開発中で、既に部分的に導入されている<sup>10</sup>。ただし、学習目標と学習方法の提示については、教材設計の中に埋め込まれているものの、より明示的な形での提示を検討する余地があるであろう。次に、学習上の柔軟性を高める機能としては、文字・音声・映像の目的に合わせた利用やレベル選択は教室用及び学習者用ページにおいて実現している。また、コンテンツ内の相互リンクや他のリソースへのリンクも『TUFS 言語モジュール』全体として進行中である。最後に、学習動機を高める機能としては、『TUFS 言語モジュール』の設計の段階でエンターテイメント的要素、定期的な更新、短いユニットサイズ等は既に考慮されている。

このように全体として開発が進んでいる機能を活かしつつ、『日本語会話モジュール』の学習用に特に必要な内容・機能を補足・追加し、より効率よく、より楽しい自己学習を支援することが主なねらいとなる。

以下の節では、以上の考察をふまえた上で、具体的なコンテンツ作成の基本方針とその内容を、学習内容面での支援と学習方法面での支援に分けて論じる。

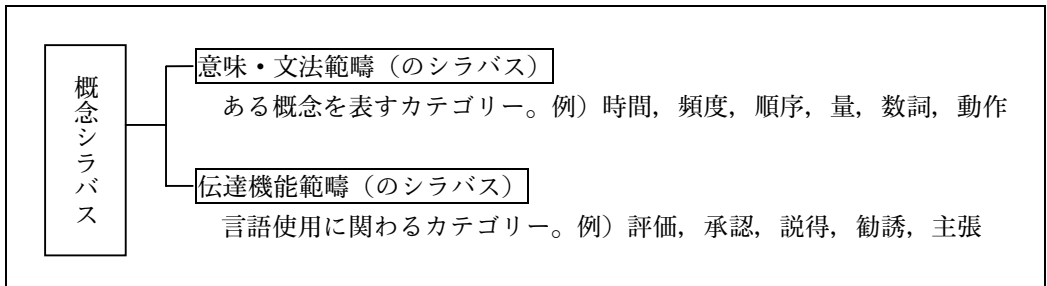
### 3. 学習内容面での支援

#### 3.1 基本方針：機能シラバスとしての特性を活かす

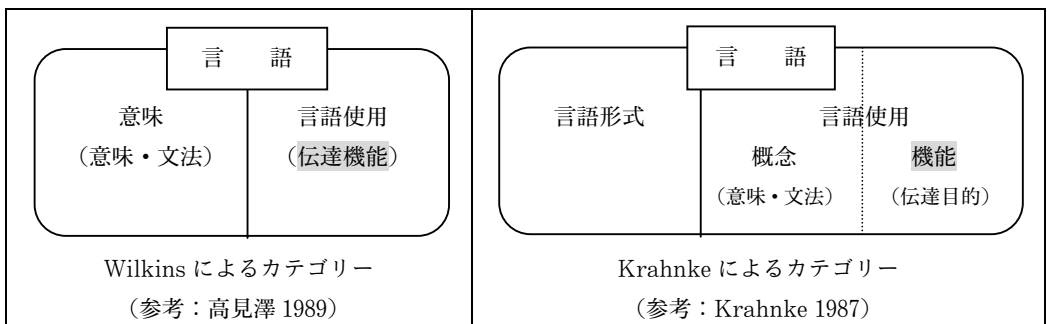
学習内容面での支援としては、『日本語会話モジュール』の特徴である機能シラバスの特性を活かし、その内容の充実化を図ることをねらいとする。機能シラバスにおける「機能」

<sup>10</sup> 『TUFS e-Learning System』 URL： [http://www.coel.tufs.ac.jp/html\\_src/login.htm](http://www.coel.tufs.ac.jp/html_src/login.htm)

とは、ある発話や言語的単位が使用される伝達目的（Brumfit and Finocchiaro 1983:13）にあたるもので、行動の範疇によって表される。1970年代、伝達能力の育成を目指す言語教授法の開発に伴い、言語の意味・機能に焦点を当てたシラバスの開発が進んだ。その発端となったのが、D. A. Wilkins が提起した「概念シラバス (notional syllabus)」(【図3】)である (Wilkins 1976)。この「概念シラバス」は、意味・文法範疇によって表される「概念」と伝達機能を表す「機能」の範疇からなる。他方、Krahnke (1987) は、概念と機能の定義を言語使用の範疇におき、言語形式の範疇と区別している (【図4】)。



【図3】 Wilkins による概念シラバス (参考：高見澤 1989:87)



【図4】 言語における機能のカテゴリー化の比較

このように言語の意味・機能に焦点を置いた「概念・機能シラバス<sup>11)</sup>」では、まず学習者にとって必要度の高い概念や機能及びその使用場面が選ばれ、対応する構造項目、その場面で使用される関連表現や語彙が肉付けられていく。同時に、従来の構造的基準を重視した構造シラバスにはなかった以下のような検討事項が生じてくる。

- 1) 機能と構造の対応関係：まず特定の機能を教授する際に問題となるのが、どの構造項目と関連づけて教授するかという点である。例えば、「依頼する」という機能を具現化する必要な言語構造は複数存在するため、シラバスを組む際にどの構造と関連づけて教授するかを決める必要がある。また、ある機能を実現するのに

<sup>11)</sup>高見澤 (1989) は、「概念シラバス」が「意味・文法範疇のシラバス」の意味で使われ、「伝達機能範疇のシラバス」と対等なものとして、合体して「概念/機能シラバス (notional/functional syllabus)」と呼ばれることもある、と述べている。

一つの構造を覚えるだけでは不十分であり、場面や話者同士の関係に応じて適切な構造を選択できるようにならなければならない。いかにして機能と構造の多様な関連付けを行うかも機能シラバスの課題である。

- 2) 機能と場面の対応関係：同様に、特定の機能を教授する際に、どのような場面と関連つけて教授するかという点も問題となる。ここで考慮する「場面」とは、場・役割・話題の3点を含むコミュニケーションの状況 (situation) (高見澤 1989) と定義される。特定の機能を達成する際に選択される言語構造は、場、役割 (伝達者同士の関係)、話題によって決定される。学習者が場面に応じて適切な構造を選択できる能力を養うには、特定の構造が使用される場面的情報をなるべく正確に提示する必要があるといえる。
- 3) 関連表現・語彙：機能を場面と関連つけて提示する場合、その場面と関連する定型表現や特殊な語彙が多くなる点も問題となる。
- 4) 社会的・文化的要素：学習者にとって必要度の高い場面における機能を提示するシラバスでは、構造シラバスに比べて社会的・文化的要素が強くなる点も考慮すべきである。

### 3.2 『学習者ガイド』に盛り込む内容

上述のような機能シラバスの特性を考慮した場合、『学習者ガイド』では以下の内容を盛り込むべきであろう。

#### (ア) 機能、場面、構造、話題の対応関係

1で述べた通り、『日本語会話モジュール』では、40の言語機能に対し、初級レベルの文型・表現、関連表現、話題、社会・文化事項が、大学生生活の会話場面に埋め込まれている。『学習者ガイド』では、これらの関係が分かるよう、一覧を盛り込むべきであろう。一覧表のサンプルは、付録1を参照されたい。

#### (イ) 登場人物についての説明

先述のように、『日本語会話モジュール』では、大学生や教師などの特定の登場人物を想定しているが、会話者や場面による構造の選択をより詳細に理解してもらうには、登場人物の特性や関係を明示的に示す必要がある (【図5】を参照)。例えば、第7課「さようならを言う」で、大学4年生の田村は田中先生に対して「失礼します」と述べるのに対し、田中先生は「さようなら」と述べている。会話者に応じて構造の選択が異なることを理解する上で、登場人物の特性を理解することが重要となる。

【図5】 『日本語会話モジュール』の主な登場人物一覧

山田拓也：大学1年生。19歳。日本語科。テニスサークル。斉藤先生の授業（音声学）を受講。

鈴木あゆみ：大学1年生。19歳。英語科。ダンスサークル。田中先生の授業（言語学概論）を受講。

野村浩二：大学4年生。22歳。英語科。就職活動中。斉藤先生の授業を受講。

田村美子：大学4年生。22歳。日本語科。就職活動中。田中先生の授業を受講。斉藤先生のゼミ所属。

渡辺大輔：大学院生（博士課程）。ダンスサークル。日本語科の教務補佐。

吉田真希：大学院生（修士課程）。テニスサークル。田中先生のゼミ所属。田中先生の教務補佐。

田中先生：英語科の先生。専門は、言語学。

斉藤先生：日本語科の先生。専門は、音声学。

### (ウ) 場面と話題

1で述べたように、『日本語会話モジュール』の会話は大学生活に関連する場面と話題が、4月に始まり3月に終わる学年暦にほぼ沿う形で配列されている。例えば、春には、「授業登録」「証明書の発行」「初めての授業での自己紹介」「卒業論文への準備」、夏には、「夏休みの計画」、秋には「スポーツ大会」、「卒業後の進路」、「学園祭」、冬には「風邪」「謝恩会の準備」、最後は「卒業式」などの話題が登場する。モジュール教材であるため、学習順序を固定することはできないが、場面と季節との関係を理解することは、日本の大学生活の流れを理解する上でも重要となる。(付録1を参照)

### (エ) 重要表現と関連表現

先述のように、各会話では重要表現と関連表現が提示される(付録1を参照)。これらの表現の使い方についての解説が必要となるであろう。例えば、第1課「挨拶をする」では、「おはようございます」という重要表現が提示されるが、学習者は「おはよう」との使い分け、また「こんにちは」「こんばんは」との使い分けなどについて知る必要がある(付録3を参照)。また、重要表現や関連表現は、モジュール内の他の課や他のモジュールにおいて使用されている。こうした使用箇所とのリンクを貼ることで、表現の使用例を多岐に渡って提示することができよう。

### (オ) 社会・文化事項

『日本語会話モジュール』に埋め込まれる社会・文化事項に対する解説は現時点では与えられていない。こうした事項の理解は日本事情学習として必要であるだけでなく、会話の内容理解においても欠かせない。例えば、第32課「禁止する」で、ゴミを捨てようとする学生に、事務員が「そこに捨ててはいけません」と禁止する会話が提示されるが、その場面でゴミをそのゴミ箱に捨てることを禁止される理由は、外国人学習者にとって必ずしも明確ではなく、ゴミの分別を理解することで初めて理解される内容であろう。同様に、第2課「感謝する」で学生が教師から書類に押印してもらう理由は、書類に押印する習慣を理解することで始めて理解される(付録3を参照)。

また、こうした社会・文化事項は、E-ラーニング教材の特性を活かし、音声や映像とともに提示できる。第29課「妥協する」で、学生食堂でたぬきうどんが売り切れていることを知り、きつねうどんに変更する会話が提示されるが、ここでたぬきうどん、きつねうどんを写真と共に提示することで一層理解が深まることであろう。



## 4. 学習方法面での支援

### 4.1 基本方針：学習ストラテジー研究の成果を活かす

次に、学習方法面での支援では、主として学習ストラテジー研究の成果を活かし、自己学習で有効となる学習ストラテジーを盛り込むことを試みる。以下、学習ストラテジー研究の成果について論じた上で、『学習者ガイド』に盛り込む内容を考察する。

#### 4.1.1 学習ストラテジーの種類

先述のように、特に自己学習という形態を想定した場合、学習者自ら学習を計画し実行することが要求され、教室学習では教師の役割であったことも学習者に委ねられる。このような教師の介入が少ない学習形態では、学習者の自律性が教室学習以上に要求されることになり、ストラテジー使用上の問題が生じることが予測される（海野 2004）。そのため、『学習者ガイド』には、学習ストラテジーの使用を助ける要素を盛り込むことが望まれる。

言語教育の分野で「学習ストラテジー」への関心が高まって 30 余年間、その定義について完全な一致は見られないが、「学習者が第二言語の知識を習得する際に用いるテクニックあるいは方策（Rubin1975, 伴訳 1999）」、あるいは「学習をより易しく、より早く、より楽しく、より自主的に、より効果的に、そして新しい状況にすばやく対応するために学習者がとる具体的な行動（Oxford 1990, 宍戸・伴訳 1994）」との捉え方が一般的である。また、自律的学習という視点から、田中・斎藤（1993）は学習ストラテジーを「学習者が様々な環境の中から学習に役に立つもの（学習のリソース）を選択して、自らの学習に有効であると考えてインターアクションするときの手段・方法」と定義している<sup>12</sup>。

学習ストラテジーの研究の端緒となったのは、いわゆる「優秀な言語学習者研究」である。Rubin（1975）は学習者の観察、学習者へのインタビュー、学習の日記を分析することにより、優秀な学習者の特徴を記述した。このような「優秀な言語学習者」の研究が契機となり、学習者の学習ストラテジー観察が行われ、学習ストラテジーの分類や体系化の試みが行われるようになった。学習ストラテジーの定義と同様に、分類についても研究者間での一致は見られていないが、O'Malley and Chamot（1990）と Oxford（1990）の分類が代表的である。O'Malley and Chamot は、学習ストラテジーをメタ認知ストラテジー、認知ストラテジー、社会・情意ストラテジーの 3 種に分類を行い、以下のように特徴付ける。

メタ認知ストラテジー：学習過程に関する思考、学習の計画、タスクのモニター、評価に関わる。次のものを含む。1) 学習計画を立てる、2) 注意を向ける、3) 選択的注意を向ける、4) 自己管理する、5) 自己モニターする、6) 問題点を見極める、7) 自己評価する

---

<sup>12</sup>学習ストラテジーの定義の概観は海野他（2004）を参照のこと。

認知ストラテジー：学習する（言語）資料とのインターアクション，資料の心的あるいは物理的操作，特定の学習タスクに対するストラテジーの適用に関する。これには，1) 繰り返す，2) リソースを利用する，3) グループ化する，4) ノートを取る，5) 帰納的・演繹的推論，6) 代入する，7) 精緻化する，8) まとめる，9) 翻訳する，10) 転移，11) 推測する，などがある。

情意ストラテジー：学習過程における情意面のコントロールに関する。1) 自分自身に話しかける，2) 自己強化（自分自身を肯定的に評価する）などがある。

社会ストラテジー：学習を助けてくれる他人とのコミュニケーション，効果的なコントロールに関する。1) 質問する，2) 協力しあう，などがある。

一方，Oxford (1990) は，O'Malley and Chamot (1990) の「認知」範疇を「記憶」，「認知」，「補償」に細分化し，これら3つを目標言語に直接関わる「直接ストラテジー」としている。他方，直接関与はしないが学習を支える「メタ認知」，「情意」，「社会」の3種類を間接ストラテジーとして区別している。

その後，こうしたストラテジーの種類の記事の上に，成績，出身地域，性別，社会的身分，日本語の学習歴などの学習者特性による学習ストラテジーの相違を明らかにしようとした調査が行われている（石橋 1993，石橋 1994，伊東 1993，伊東 1994，西村 1993，西村 1994，服部 1996，伴 1989，Grainger 1997，Oxford 1993 など）。しかし，近年では，Chamot (2004) が指摘する通り，特定のストラテジー使用が重要なのではなく，タスクに応じて適切なストラテジーを選択できる能力の必要性が叫ばれている。

#### 4.1.2 自己学習における学習ストラテジー使用

では，E-ラーニング教材を用いた自己学習ではどのような学習ストラテジーが必要となるであろうか。また，そうした学習ストラテジー使用はどのようにすれば促せるであろうか。

まず学習者は，自ら学習目標を定め，そのための学習計画を立てる必要がある。菊池 (2004) が指摘するように，成功する言語学習では明確な学習目標を持つことが重要視されるが，目標設定に困難を感じる学習者も少なくない。また，特に E-ラーニング教材を用いた学習計画では，多様な利用法が可能である反面，適切な利用法の選択に迷う学習者も少なくないであろう。既に教材の中に埋め込まれている部分もあるとしても（例えば「学習者用」ページにおける学習モデルなど），学習者が自分自身のニーズを見極め，目標を設定して学習計画を立てられるよう支援が必要となるであろう。次に，学習者はその計画にしたがって実行し，学習を維持・継続していく必要がある。学習管理を支援する機能は既に一定程度開発中であることは既に述べた。Umino (2005) は，長期的目標を持つ学習者と短期的目標を持つ学習者とは選択したストラテジーが異なると報告している。それぞれの学習目標に応じて継続可能な学習運営を見出すとともに，学習者が自らの目標設定と計画の妥当性について評価・検討できるよう支援しなければならない。また，孤立しがちな自己学習では，継続自体が困難になることも知られている（Rybak 1983，Umino 2004）。

学習動機の維持を助ける情意ストラテジーや、孤立を避けるグループ学習などの社会ストラテジーも奨励されることである。

学習自体に直接関与するストラテジーとしては、特に E-ラーニング教材という媒体を有効活用するためのストラテジーが必要となろう。Umino（2006 予定）は、視聴覚教材を用いて自己学習した学習者が好んで利用したストラテジーとして「選択的注意」、「ノートを取る」、「リソースの活用」を挙げている。特に「選択的注意」は、情報の種類と量の多い E-ラーニング教材では同様に必要となると思われる。E-ラーニング教材の特質を活用する上で有効なストラテジーについては、今後さらなる調査が必要であろう。また、こうした教材自体を使い慣れない学習者には、操作方法などの基本的な支援も重要である。さらに、E-ラーニング教材自体から社会的相互作用が得られない場合、それを補う手立てを自ら講じる必要も生じてこよう。

## 4.2 『学習者ガイド』に盛り込む内容

以上のようなストラテジーの利用を促すには、主に二つの方法が考えられる。一つは、学習方法を明示的に提示することで、直接的に支援する方法、もう一つは、ストラテジーを使いやすい環境を整えることで間接的に支援する方法である。

まず、直接的な方法として、「学び方のアイディア」を提示する方法がある。

### (1) 学び方のアイディア

ここでは、学習者が自覚的にストラテジーを使用できるよう、有効と思われる学習ストラテジーを明示的に示す。先行研究の成果から、自己学習において有効であることが知られているストラテジーの例を以下に示す。

- 1) 学習の規則性を保つ：自己学習では学習する場所、時間、進度などが概して乱れがちであるため、継続していくためには規則性を保つことが有効である。
- 2) 外的圧力を自ら生み出す：拘束性の低い自己学習では、自らを圧力を感じる状況に追い込むのも有効である。学習する時間帯を決めたり、他の学習者と一緒に学習するなどはその一例である。
- 3) グループで学習する：自己学習は孤立しがちで、また社会的インタラクションの欠如も問題となる。クラスメートや家族と一緒に学習するのは、学習動機を高め、継続を可能にするため、有効なストラテジーである。
- 4) 教室学習と組み合わせる：自己学習だけで学ぼうとせずに、教室学習の補助として使うのも有効な利用方法である。学習項目一覧などを利用して、教室学習の予習・復習として利用したり、補足として一部分のみ（例えば社会・文化事項のみ）利用するなどの方法があげられよう。
- 5) 一定期間利用する：どんなに優れた教材でも、その成果はある一定期間利用しなければ現れないものだ。即座に成果が見られなくとも、一定期間利用するよう奨励するべきであろう。またそのつど学習目標と方法を見直す必要があるであろう。

また、特に E-ラーニング教材を利用した学習に関連するものとして、以下が挙げられる。

- 6) 会話の自然な速度にパニックをおこさない：特に海外で学ぶ学習者は、日本語による自然会話に触れる機会に欠けるため、そうしたインプットに触れた当初困惑を覚えることがある。繰り返し利用することで聞き取れるようになることを知らせる必要がある。
- 7) 印刷媒体を有効に利用する：特に E-ラーニング教材を使い慣れない学習者にとっては、画面上で操作するだけでなく、コンテンツをダウンロードして印刷教材として活用する方法があることも知らせておくといえよう。
- 8) 学習ツールであることを自覚する：特にインターネットなどを利用し慣れている学習者には、教材が単なるエンターテインメントではなく、学習ツールであることを自覚させる必要が時として必要となることがあろう。

あるいは、学習の目標設定や学習計画を助ける選択肢を与えて、より間接的に誘導する方法もある。(付録 2 を参照) 目標設定としては、「重要表現のみ」「会話でよく使う表現」「大学でよく使う表現」「社会・文化事項」「発音」「全て」などの選択肢を提示し、学習者のニーズと学習したい内容の明確化を支援できる。学習計画では、学習の進捗や期間の決定、学習方法や練習方法の選択(聞く、話す、読む、書くなど)などが考えられよう。

次に、ストラテジーを使いやすい環境を整えることで間接的に支援する方法としては、以下が考えられる。

## (2) 『日本語会話モジュール』の目的と構成の提示

学習者が自らの目標設定を行うには、教材自体の目的と構成について理解しておく必要がある。情報としては、このモジュールが 40 の機能を日本の大学生生活で必要な場面で提示している点、「教室用」と「学習者用」ページがある点、他のモジュールとの関係などの説明が必要となろう。

## (3) 学習項目の一覧の提示と検索機能

学習計画を立てる上で、具体的学習項目の一覧も有効である。言語機能、場面、構造、社会・文化事項などから検索可能にすることで、学習目標に応じた学習計画を支援することになるであろう。

## (4) 操作方法についての説明

とりわけ E-ラーニング教材を使い慣れない(特に海外の)学習者には、操作方法についての説明も必要である。

## (5) ダウンロード機能

情報量の多い E-ラーニング教材を使いこなす上で、印刷媒体による教材を用意すること

で柔軟なストラテジー使用が可能となる。『学習者ガイド』の全文と共に、『日本語会話モジュール』のスキプトの全文をダウンロード可能とすることで、多様なストラテジーの使用を促進できると考える。

## 5. 『学習者ガイド』の構成案と今後の課題

### 5.1 『学習者ガイド』の構成案のまとめ

以上の考察をふまえて、『学習者ガイド』に含まれるべき情報・機能についてまとめると、【図6】のようになる。

『日本語会話モジュール』について
構成
登場人物
ストーリーと場面
機能・文法事項一覧
操作説明
学び方のアイデア
ダウンロード
『学習者ガイド』全文
会話文全文
各ユニットの解説
重要表現・文化事項

【図6】『日本語会話モジュール学習者ガイド』構成案

まず、全体に関わるものとしては、教材の構成・内容についての説明がある。ここでは、構成に関わる説明、登場人物の説明、ストーリーと場面についての説明を設ける。学習項目となる機能や文法事項、文化事情についての一覧（インデックス）も有用であろう。次に、操作方法の説明を随時参照できるようなページが必要である。特に教室用の会話モジュールでは、音声消去やスキプト消去など、学習の柔軟性に応える機能があるにもかかわらず、それらに関する説明が不足しているからである。また、学習ストラテジーを意識化させるための「学び方のアイデア」では、主に学習の目標や計画、方法の意識化を主眼とし、具体案の提示を試みる。学習の柔軟性を高めるためには、『学習者ガイド』全文や会話文全文のダウンロード機能を設けることも有効だと思われる。

次に、各ユニットにおける学習を深めるための内容を個別的に提示する(付録3を参照)。ここでは重要表現や関連表現、社会・文化事項についての解説が含まれる。重要表現では言語的バリエーションや文型・文法事項についても簡単な解説を加える。社会・文化事項では、日本文化・日本事情に関する情報や解説を、写真と文章で提示する。

また、これらの内容は Web ページで作成し、操作自体が学習を阻害しないように、リ

ンクですぐに参照できるよう構成することも重要であろう。

## 5.2 結びと今後の課題

本稿では、『日本語会話モジュール学習者ガイド』開発の基本方針とその理論的背景について論じてきた。本ガイドの開発にあたっては、機能シラバスの特性を活かした学習内容をさらに充実させるとともに、自己学習する学習者に対する学習方法支援を提供することに主眼をおき、学習ストラテジー研究の成果を反映させようと試みた。本書の橋本・森本(2006)が示す通り、学習ストラテジーを活かしたサポートシステムはいまだ数少なく、本稿は、第二言語習得研究の成果を活かしたサポートシステム開発の試みとしても、今後のE-ラーニング教材開発に示唆するところがあると期待する。

また、本稿で提示した構成案は、主として、基礎調査として実施した既存のE-ラーニング教材に見られるサポート機能調査(本書の橋本・森本2006)を含めて、従来の先行研究の成果の上に立脚するものである。しかし、『TUFUS 言語モジュール』のようなE-ラーニング教材による学習の実態については未知の部分も多く、とりわけこうした教材を用いた学習に有効な学習ストラテジーについてはさらなる調査が必要である。また、開発が完了した後も、『日本語会話モジュール』や『学習者ガイド』の使用実態についての情報を蓄積し、必要となる支援を随時追加、あるいは修正していく必要がある。『日本語会話モジュール』がE-ラーニング教材の特性を活かして常に更新されていくように、『学習者ガイド』もさらなる研究成果に基づき常に更新されることで、学習者のニーズに一層即するものとなっていくであろう。学習者の個人差や多様性を考慮した教材作成には、学習者のニーズ分析や教材に対する反応・評価を蓄積し、それらのフィードバックを組み込んだ教材の改訂作業を継続すると同時に、最終的には、学習目的別に対応できるサポートシステムの構築が望まれる(吉富2004)という指摘をもって今後の課題としたい。

## 参考文献

- 池田伸子(2003)『CALL 導入と開発と実践—日本語教育でのコンピュータの活用—』くろしお出版
- 石橋玲子(1993)「日本語学習者の学習ストラテジーの調査と分析—自律的学習の手掛かりとして—」『平成5年度日本語教育学会秋季大会予稿集』135-140 日本語教育学会
- 石橋玲子(1994)「日本語学習者の学習ストラテジーの調査の分析」『拓殖大学日本語紀要』4, 91-107 拓殖大学留学生別科
- 伊東祐郎(1993)「日本語学習者のストラテジー選択」『東京外国語大学留学生日本語教育センター論集』19, 77-92 東京外国語大学留学生日本語教育センター

- 伊東祐郎 (1994) 「日本語指導法-個性と学習ストラテジーからの一考察」『東京外国語大学留学生日本語教育センター論集』20, 95-111 東京外国語大学留学生日本語教育センター
- 李徳奉 (2003) 「コンピュータによる日本語学習の認知的効果の落とし穴」国立国語研究所主催「ITを活用した日本語教育指導能力向上研修」における講演資料
- 海野多枝 (2004) 「第二言語の学習ストラテジー研究：その成果と第二言語指導に向けての示唆」『言語情報学研究報告 2』143-151 東京外国語大学大学院
- 海野多枝・菊池富美子・野村愛 (2004) 「第二言語学習ストラテジー研究に向けての基礎調査」『言語情報学研究報告 5』231-283 東京外国語大学大学院
- 大嶋淳俊 (2001) 『図解 わかる！eラーニングーグローバル競争社会に生き残る処方箋!』ダイヤモンド社
- 川口裕司 (2004) 「TUFUS 言語モジュール」『言語情報学研究報告 1』15-20 東京外国語大学大学院
- 菊池富美子 (2004) 「日本人大学生の言語学習ストラテジーとリソース」『言語情報学研究報告 5』113-132 東京外国語大学大学院
- 高見澤孟 (1989) 『新しい外国語教授法と日本語教育』アルク
- 田中望・斎藤里美 (1993) 『日本語教育の理論と実際ー学習支援システムの開発ー』大修館書店
- 西村よしみ (1993) 「日本語授業における学習者の認知過程と学習ストラテジー」『筑波大学留学生センター日本語教育論集』8, 153-173 筑波大学留学生センター
- 西村よしみ (1994) 「初級日本語授業における学習者ストラテジーと授業研究ー内的過程を把握する研究方法と技法の開発について」『筑波大学留学生センター日本語教育論集』9, 133-148 筑波大学留学生センター
- 服部美貴 (1996) 「就労目的のペルー人による日本語学習ストラテジー」『日本語教育方法研究会誌』3.1, 30-31 日本語教育方法研究会
- 橋本ゆかり・森本暁美 (2006) 「E-learning 教材における第二言語学習についての基礎調査」『言語情報学研究報告 10』東京外国語大学大学院
- 伴 紀子 (1989) 「日本語学習者の適用する学習ストラテジー」『アカデミア文学・語学編』47, 1-15 南山大学
- 伴 紀子 (1999) 「日本語教育における学習ストラテジー研究事始め」宮崎里司 J.V.ネウストプニー共編『日本語教育と日本語学習 学習ストラテジー論にむけて』23-35 くろしお出版
- 山本洋雄 (2001) 「e-learning の“光”と“影” <市場化>への課題」『コンピュータ&エデュケーション』10
- 吉富朝子 (2004) 「学習者言語分析の変遷：その成果と第二言語教育へ向けての示唆」『言語情報学研究報告 2』121-141 東京外国語大学大学院
- Chamot, A.U. (2004). Issues in language learning strategy research and teaching. *Electronic Journal of Foreign Language Teaching* 1:1. 14-26.
- Dickinson, L. (1987) *Self-instruction in language learning*. Cambridge: Cambridge

- University Press.
- Finocchiaro, M. and Brumfit, C. (1983) *The Functional-Notional Approach*. Oxford: Oxford University Press.
- Gardner, D. and L. Miller (1999) *Establishing self-access: From theory to practice*. Cambridge: Cambridge University Press.
- Grainger, P. R. (1997) Language-learning strategies for learners of Japanese: investigating ethnicity. *Foreign Language Annals* 30:3. 378-385.
- Krahnke, K. (1987) *Approach to Syllabus Design for Foreign Language Teaching*. New Jersey: Prentice-Hall.
- Matsumoto, K. and Umino, T. (2004) Development and use of the web-based second language learning materials 'TUFUS Japanese Dialogue Module'. *Current Perspectives and Future Directions in Foreign Language Teaching and Learning*. (proceedings of the CLaSIC 2004 conference) Centre for Language Studies, National University of Singapore.
- O'Malley, J. M. and Chamot, A. U. (1990) *Learning Strategies in Second Language Acquisition*. Cambridge: Cambridge University Press.
- Oxford, R. (1990) *Language Learning Strategies. What Every Teacher Should Know*. New York: Newbury House.
- Oxford, R. L. (1993) Style analysis survey. University of Alabama, Tuscaloosa AL. Later published in Reid, J. (ed.) (1995) *Language learning styles in the ESL/EFL classroom*. Boston: Heinle & Heinle.
- Rubin, J. (1975) What the "good language learner" can teach us. *TESOL Quarterly* 9, 41-51.
- Rybak, S. (1983) *Foreign languages by radio and television - the development of a support strategy for adult home-learners*. Unpublished Ph.D thesis, Brighton Polytechnic.
- Umino, T. (2004) *Foreign language learning with self-instructional television materials: An exploratory study*. 2005 雄松堂出版
- Umino, T. (2005) Learning a second language with broadcast materials at home: Japanese students' long-term experiences. In Benson, P. and Nunan, D. (Eds.) *Learners' stories: difference and diversity in language learning*. Cambridge: Cambridge University Press.
- Umino, T. (2006 forthcoming) Learning a second language through audiovisual media: a longitudinal investigation of strategy use and development. In Yoshitomi, A., Umino, T. and Negishi, M. (Eds.) *Usage-Based Linguistic Informatics Vol. 3. Readings in Second Language Pedagogy and Second Language Acquisition: In Japanese Context*. Amsterdam: John Benjamins.
- Wilkins, D. A. (1976) *Notional syllabuses*. Oxford: Oxford University Press.



## 付録 1：サンプル 1—『日本語会話モジュール』の学習項目一覧

\* 関連表現と社会・文化事項は、『学習者ガイド』に解説を盛り込む予定の内容である。

	機能	重要表現	場面	関連表現	社会・文化 事項	大学生活 の話題
1	挨拶する	おはようございます。	朝 道 学生、教師	お先に失礼します。	「先生」 名前の呼び方	登校
2	感謝する	ありがとうございます(ました)。	研究室 学生、教師	いえいえ。 わかりました。	印鑑 科目の変更	授業記録
3	注意をひく	あのう、すみません。	学生課 学生、職員	わかりました。 おねがいします。	学生課 在籍明書	証明書の発行
4	自己紹介する	はじめまして。/ 田村と申します。/ よろしくお願ひします。/—こちらこそ、よろしく。	授業 学生、教師	かまぼってください。	ゼミ、卒論 就職活動	はじめての授業
5	謝る	遅れてすみません。	研究室 学生、教師	失礼します—どうぞ。 そうですか。	レポート	レポートの提出
6	人にものをあげる	つまらないんですけど、どうぞ。	研究室 学生、教師	遠慮なく。/へえ。 どうぞ。	軽井沢、お土産 物の贈呈	お土産を渡す
7	さよならを言う	では、失礼します。/ さようなら。	帰り道 学生、教師	こんばんは。 えらいですね。		卒業論文の準備
8	金額についてたずねる	いくらでしょうか。	購買部 学生、店員	いらっしやいませ。 おねがいします。	生協 税込み	購買部で本を買う
9	経緯についてたずねる	小林先生の授業を取ったことがありますか。	キャンパス、 後輩、先輩	たいじょうぶ。 敬語	先輩 授業記録	授業記録
10	予定を述べる	友達とヨーロッパを旅行しようと思っています。	キャンパス、 後輩、先輩	女性ことば	夏休み、旅行、 バイト	夏休みの計画
11	程度についてたずねる	お爺まどのくらいわかりましたか。	キャンパス、 後輩、先輩	そういえば。 ああ。	旅行、先輩 夏休み	旅行
12	時間についてたずねる	何時から開いていますか。/ 自習室は何時まで使えますか。	図書館 学生、職員	すみません。	自習室	図書館(勉強)
13	数値についてたずねる	本は一冊ご何冊まで借りられますか。/ どれくらい借りられますか。	図書館 学生、職員	ちょっと。	図書館	図書館(図書 の貸出し)
14	手段についてたずねる	期末レポートはメールでお送りしてもいいですか。	教室 学生、教師	やっぱり。	レポート	レポートの提出法
15	能力についてたずねる	英語が話せますか。	教室 学生、教師	たいじょうぶ。	空巻、学部、運 転	先生の手伝い
16	場所についてたずねる	会議室はどこでしょうか。/ 3階へはどう行かれますか。	事務棟 学生、職員	すみません・・・お願ひします。	授業料 印刷センター	授業料を払う

17	特徴について たずねる	小沢先生の「国際法」はどうですか。	キャンパス、 後輩 先輩	成績が辛い、	先輩	授業録録
18	意見を述べる	なかなかよく書けていると思いました。 /もう少し自分の意見を書いた方がよい と思います。	教室 学生 教師	・・・君 そうですね。	レポート	レポートの返 却
19	好きなもの について述べる	「赤ひげ」とか「夢」が好きです。	喫茶部 先輩 後輩	へえ。	黒澤明 映画祭	芸術の秋
20	好きな行動に ついて述べる	ええ、食べるのが好きなので・・・。	食堂 先輩 後輩	どうも。	学食 グルメ	食欲の秋
21	手順について 述べる	まず、このボタンを押してください。/ 次に、倍率を選んで、/最後にこのボタ ンで用紙を選んで、スタートボタンを押 します。	事務室 職員 学生	すみません、拡大コピーをし たいのですか。/ところで、コ ピーカードは持っています か。	コピー	コピーをする
22	状況について たずねる	最近学校でお会いしませんか、どうしま したか。/論文のほうはどうですか。	電話 後輩 先輩	もしもし。 どうかお大事に。	電話	病後出席
23	条件をつける	もし、雨が降ったら、大会は中止です。 /小雨程度なら、中止にはならないと思 います。/大雨の場合は、授業がありますか。 /明日雨だったら、友達と映画を 見に行く約束をしているんです。	キャンパス 先輩 後輩	なるほど。	大嘗事	スポーツ大会
24	比べる	米遇の飲み会、新宿と吉祥寺と、池袋の 中で、どこが一番いいでしょうか。/新 宿と吉祥寺と、どちらがいいでしょうか。 /吉祥寺より新宿のほうが安い店が多い です。	キャンパス 後輩 先輩		飲み会、新宿・ 吉祥寺・池袋	ゼミの飲み会
25	提案する	外国で教えるというのはどうですか。	キャンパス 教師 学生		就職活動	就職活動
26	理由を述べる	じつは、就職の最終面接があるんです。 /会社が速くにあるので、無理だと思います。	教室 学生 教師		就職活動	就職活動
27	依頼する	先生に推薦書を書いていただきたくので すが、よろしいでしょうか。/米遇の金 曜日までにお願、できないでしょうか。	キャンパス 学生 教師	お忙しいところを申し訳あり ません。		推薦書

28	例をおげる	いろいろな国の音楽を演奏したり、お芝居やダンスをやったり、料理店を出したりします。/タイや韓国やイタリアやいろいろな国の食べ物があります。	キャンパス 学外の人、学生		大先輩	学園祭
29	妥協する	きつねうどんです。	食堂 学生、店員	天ぷらうどん、おねがいします。	天ぷら・たぬき・きつねうどん	学生食堂
30	許可を求める	次の購読の授業でお借りしてもいいですか。/返すのは、お昼休みでもいいですか。/4限目の英作でもお借りしたいんですが。	授業 後輩、先輩			物の貸し借り
31	しないけれども ならないと言う	シンポジウムはかみならず出ないけれどもいいか。	教室 教師、学生	よろしくおねがいします。		シンポジウム
32	禁止する	そこに捨ててはいけません。	キャンパス 職員、学生	ちょっと、申し訳ありません。	ごみの捨て方	学内の規則
33	指示する	そこにとめてください。	駐輪場 職員、学生	ちょっと、すみません。わかりました。	自転車置き場	学内の規則
34	しないでくれ と言う	顔写真載せないでください。/いいですか。	研究室 学生(補佐)、教師	わかりました。/ちょっとお願いがあるんですけど、/ちょっと、すみせんかも	ゼミ、補佐	ホームページ 作成
35	しなくてもよ いと言う	出なくてもいいですよ。	キャンパス 先輩、後輩	かみぼってね。	試験	期末試験 クラブ活動
36	招待する	よかったらぜひ見に来てください。	キャンパス 後輩、先輩	わかった。	先輩、学園祭	学園祭
37	助言する	早く病院へ行ったほうがいいですよ。	図書館 後輩、先輩		卒論、先輩、合宿	病気(風邪)
38	要求する	パンフレットを送ってほしいんですが。	電話 学生、店員	おねがいします。	携帯電話、謝恩会	謝恩会の準備
39	希望を述べる	海外で働きたいと思っています。	学内 先輩、後輩	へえ。/お待ちせしました。	就職活動、先輩	就職内定
40	人を紹介する	先生、こちらが私の母です。	キャンパス 学生、母親、教師	おめでとう(ございます)。-ありがとう(ございます)。/大変お世話になっております。	卒業式、社会人	卒業式

## 付録2：サンプル2－学び方のアイデア（目標設定と学習計画）

『TUFS 日本語会話モジュール』の内容や使い方はわかりましたか。それでは、どのように勉強するか、考えましょう。

- ① 目標をたてましょう。
  - 何を勉強しますか
    - －重要な表現を勉強します
    - －会話でよく使う表現を勉強します
    - －大学でよく使うことばを勉強します
    - －日本の大学のことや、日本の生活のことを勉強します
    - －日本人の発音を勉強します
    - －ぜんぶ勉強します
- ② 計画をたてましょう。
  - だれと勉強しますか
    - －ひとりで勉強します
    - －友だちと勉強します
    - －日本人と勉強します
  - どのくらい勉強しますか
    - －40日勉強します
    - －1日に30分勉強します
    - －週にユニットを1つ勉強します
  - どうやって勉強しますか
    - －「教室用」を使います
    - －「学習者用」を使います
    - －「学習者ガイド」の「各ユニットの解説」を使います
  - どんな練習がしたいですか
    - －話す練習がしたいです
    - －聞く練習がしたいです
    - －書く練習がしたいです
    - －読む練習がしたいです
  - どの順番で勉強しますか
    - －ストーリーの順番で勉強します
    - －好きな順番で勉強します

どのように勉強するか、決めましたか。「機能・文法事項一覧」や、「ストーリーと場面」を見て考えてください。この「学習者ガイド」や、会話文を、プリントアウトすることができます。字を読みたい人は、プリントアウトして使ってください。

02 感謝する

**重要表現**

**ありがとうございます。**

**ありがとうございました。**

お礼を言うときの表現です。「ありがとうございます」「ありがとうございました」は丁寧な言い方で、先生など目上の人に対してや、あらたまった場面で使います。友達や家族など親しい人や、目下の人に対しては「ありがとう」を使います。

例) 鈴木さん、この本、ありがとう。おもしろかったよ。

**その他の重要表現**

**いえいえ。**

「ありがとうございました」「ありがとうございます」の返事として便利なことばです。

例) 昨日はありがとうございました。

—いえいえ。

**わかりました。**

なにかを頼まれて、それを了解したときに使います。

例) 田中さん、このプリントをコピーしてください。

—わかりました。

**文化と生活**

**印鑑(いんかん)**

個人や団体のしるしとして、サインの代わりに使います。スタンプのように印鑑を紙に押し、名前が紙に写ります。学校の書類や履歴書を書くとき、家に郵便物が届いたとき、銀行の口座を開くとき、契約を交わすときなどに使います。

